郷土摂津
いにしえ通信

平成十年七月一日
第三号

発行
摂津市三島一丁目一番一号
摂津市教育委員会
生涯学習部　生涯学習課

□■□刊行のお知らせ□■□

おじいさん・おばあさんが若かったころ

摂津市域 昔の暮らし

昔から摂津市域で暮らしてこられた六十歳代から八十歳代の方々に平成八年から九年にかけて「昔の暮らしの様子」を聞かせていただいたお話をまとめました。
（延べ五十三人）

中布配料無※

階で
6に
館課
新習
所学
役涯
市生

おもな内容

◎日常の生活と地域の様子
- 年中行事・学校と先生
- 結婚式・葬式・ご馳走
- 買物と行商・伊勢音頭
- 鳥飼の渡し・お参り・講
- 昔の子どもの遊び歌など

◎米作りを中心とした農業
◎地場産業
- メリヤス・ウド・鳥飼ナス
- ムシロ・柳コウリなど

◎郷土を襲った大きな災害
- 大塚切れ・室戸台風など

◎村の組織と機能
◎聞き取りで得られた摂津市地域の方言
◎伝えておきたい印象的な話
◎郷土のおはなし（狐・狸）
◎郷土を守り発展させる

§§§など、昔の話が満載§§§

お知らせ

◎大阪府内で開催される展示・講演会・シンポジウムなどの情報をいちはやく、お知らせします。

能面にみる能の世界
―能面は今も生きている―

とき　七月十八日から九月十三日まで
場　所　和泉市池上町四四三
大阪府立弥生文化博物館
開館時間
午前十時から午後五時
休館日　毎週月曜日
（七月二十日・二十一日は休館）
入館料　おとな　三〇〇円
高大生　二〇〇円　小中生・六五歳以上の方は無料
☎〇七二五―四六―二二六二
※七月四日～一七日まで鳥取県妻木晩田遺跡群の写真展も同時に開催されています。

おじいさん・おばあさんに聞きました

摂津市域　ちょっと昔のくらし

その3「子どもの遊びとお手伝い」　大正から昭和初期

子どもの遊び

◎戸外の集団的な遊びが多くからだ全体を使った健康的なものがめだちます。

◎地域や時代によって、男女別々に遊ぶ傾向が強かったり男女いっしょに遊ぶのが普通だったりします。

男の子の遊び

ベッタン（メンコ）・ラムネ（ビー玉）・バイ（ベーごま）・こま回し・戦争ごっこ・くぎ刺し・たこ揚げ・しのべ鉄砲・ちゃんばら・竹馬・竹とんぼ・肝試し・たらい舟（菱採り）など

女の子の遊び

オコンメまたはオコメ（おじゃみ）・メンコ（おはじき）・まり突き・羽根突き・縄跳び・セッセッセ・糸取りなど

共通の遊び

・缶蹴り・輪回し・ケンケン・かくれんぼ・かごめかごめ・目かくし鬼・チップカップ（野球のようなもの）・けんぱ・花いちもんめ・すごろく・いろはかるた・百人一首・風車・竹べら返し・城取り（陣取りの一種）・押し合い（押しくらまんじゅう）・下駄かくし・中の中の小ぼんさん・つり日・木登り・虫（きりぎりす、蛍、とんぼなど）取り・水泳など（川での水遊び）・じゃこ（雑魚）取り・貝（しじみ、たにし、どぶ貝）拾い・カニやエビ取り・将棋（挟み将棋や早回りなどいろいろな遊び方がある。）

遊びに伴う歌

◎たくさんあるので一部のみ紹介します。

「おこんめ」

おこんめ、おこんめ、ほい。

……さらって、落として、お皿。

「縄跳び」

郵便屋、配達屋、葉書落ちました。一枚、二枚、三枚、四枚……。

「押し合い」

押せ押せ、ごんぼ、出たもん負けや。

「羽根突き」

ひとめ、ふため、みやこし、よめご、いつやの、むかし、ななやの……。

「ぼんさん」

ぼんさん、ぼんさん、どこ行くの。あの山越えて……。

「中の中の」

中の中の、こぼんさん（またはこぼとけさん。）なんで背が低い……。

お手伝い

◉よくお手伝いした人が多く、中にはほとんどしなかった人もありました。

◉田植えや稲刈のように特に忙しい時期になると、学校は一週間ほど農繁期休暇になりました。

◉以下は、子どもに課せられることの多かったと思われるお手伝いです。

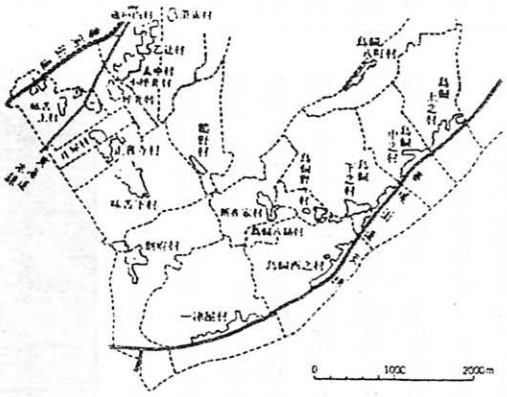
「水車踏み（水路の水を田へ揚げる）」「子守り」「風呂の水汲み」「お使い」「牛のえさの草を刈る」「足を洗う」「牛の世話」「米つき（精米）」

（カットは「続浪花風俗図絵」杉本書店」より）

担当　（源）

郷土史コーナー

摂津市域は大きく分けて、味舌地区、味生地区、鳥飼地区、三宅地区の４地区に分かれます。昔は各地区ごとのつながりが少ないので、各地区で特徴のある歴史が刻まれています。各地区ごとの歴史を紹介します。



◎明治１８年の集落分布図

味舌

《地名のいわれ》

どうして、味舌の名がついたか、はっきりとわからないが、二つの説がありますので紹介します。

①むかし、味舌の辺は葦生（あしう）の里といって、葦（あし）や茅（かや）がたくさんあったので沼でした。そして、鶴などが多くいました。その後海が遠ざかるにつれて、水もはけ、沼地がへり、肥沃な平野が出来ました。そして、この辺一帯は耕作地に適した土地になったので、味舌（うました）と呼び、今では味舌（ました）と呼ぶようになりました。

②『天平勝宝年中、行基僧正難波の津に遊ぶ。尓時北方紫雲霊光あり。僧正爰に至る。老翁遇、此所は大悲有縁の霊場也。急ぎ寺院を草創すべしとて、種々の珍菓を与へ去。空、如も放光。就是行基自ら大悲の像を彫刻して安置せり。因つて放光山味舌寺と号す』と「摂陽群談」に書かれており、この味舌寺から味舌と呼ばれるようになりました。

《味舌の村々》

味舌――味舌上・庄屋・坪井村・正音寺・味舌下五カ村の総称で味舌郷とも言われました。元和初年（一六一五年）の摂津一国高御改帳では織田信長の弟有楽（長益）知行の「味舌・坪井・上村・庄や・下村」二千九七石余と高槻藩内藤信正知行の「味舌村・正音寺村」三六七石余となっていました。しかし、寛永～正保期（一六二四年～四八年）の摂津国高帳では「味舌村小五ツ有」として、大和戒重藩（後の芝村藩）織田長政領二千一四八石余と、京都所司代板倉重宗領三三八石が記載されています。江戸時代の初期までは五カ村一括して把握されることが多くありました。

その後順次分村し、元禄郷帳には「味舌」を冠した五カ村が記載されています。享保二〇年（一七三五年）の摂河石高帳には各村高が載せられています。しかし、村々の分立はかなり早くから進行していたものとみられ、文禄三年（一五九四年）検地帳は「味舌之内下村」「味舌村ノ庄屋村」として作成されています。

なお、村切と領主支配が確定していくなかで、正音寺村のうちの幕府領分のみが味舌村の名で明治三二年（一八八九年）まで残りました。

水利の面から、特に芝村藩領味舌上・坪井・庄屋三カ村は強く結びついていました。味舌上村には三カ村立会で三カ村のおもな水源である大池（味舌池）、現在の市場池がありました。この池の帰属をめぐる争論が三カ村と隣の山田下（現吹田市）との間で起こりました。　（つづく）

※平凡社「大阪府の地名」より

担当　（茗荷）

考古雑話

第３回　わかりつつある縄文時代の生活③

三内丸山遺跡の発掘と縄文時代の生活

歴史の教科書では長く縄文時代は狩猟・漁猟・採集を生活の基盤としていたと考えられてきました。皆様も縄文時代のイメージといえば、人々は五・六軒の住居が並んだ小さな住居に住み、毛皮を身にまとい、シカやイノシシを狩りし、木の実を拾い、自然に依存するだけの原始的な生活という印象をもっているかもしれません。

しかし、今日の調査・研究の進展はめざましく日々新たな知見が得られています。

われわれがもつ縄文時代のイメージは変わりつつあります。縄文時代は低いレベルのまま、さしたる変化もなく、いたずらに足踏みしていたわけではなかったのです。縄文文化は自らにみがきをかけ充実の度合いを深め、主体性をもち、安定した道のりをあゆんでいたのです。

（つづく）

縄文時代の出来事

時期	年代	考古学上の出来事
草創期	13000	・土器の出現 ・石鏃の出現
	10000	
早期		・水産資源の本格的な利用と貝塚形成
	6000	
前期		・漆技術の発達
	5000	
中期		・打製石斧の増加
	4000	
後期		・土器の用途に応じての分化
	3000	
晩期		・小型精製土器発達 ・抜歯風習の盛行 ・農耕技術の伝来

展示解説

◎短期集中連載

「大地に刻まれた歴史」

蜂前寺跡一次調査

前回の解説では須恵器（すえき）の甕棺（かめかん）について説明しました。今回はその他の遺構・遺物について説明します。

今回の発掘調査では溝が二条、土坑（どこう）が四つ検出されました。

そして、それらの遺構からは様々な遺物が出土しました。より古い溝からは、ほとんど遺物を含まない状況でしたが新しい方の溝からは、土師器（はじき）・瓦・羽釜（はがま）などが出土しました。これらの遺物には時期差がありますが、おおむね室町時代から江戸時代にかけての時代が想定できます。

これらの溝よりさらに新しい土坑のなかからは寛永通宝（かんえいつうほう）が出土しました。寛永通宝は寛永一三年・一六三六年に鋳造をはじめた銅銭です。江戸時代を通じて一般的に流通し明治の貨幣改革まで使用されます。

あ　あいうえおから始まる

【う】　馬

○愛知県名古屋市熱田高倉貝塚で弥生時代の遺物に伴い馬の骨や歯が出土したと発表されて以来、馬の日本における初源について活発に議論されるようになりました。○その後縄文・弥生時代の遺跡から数十例の馬骨や馬歯の発掘があいつぎます。○古墳時代になると乗馬の風習が伝来し、馬具が大量に古墳に副葬されるようになります。

担当　（伊部）